

## 建築家上浪朗の逋信局舎建築作品に関する考察

—広島郵便局電話分室と広島逋信局庁舎建築を中心として—

ARCHITECT AKIRA UENAMI AND THE ARCHITECTURAL WORKS IN THE BUILDING  
REPAIR SECTION AT THE MINISTRY OF POSTS AND TELECOMMUNICATIONS—Telephone exchange branch of Hiroshima post office building and Hiroshima posts and  
telecommunications office building—

李 明\*, 石丸紀興\*\*

*Li MING and Norioki ISHIMARU*

This paper focuses on Akira UENAMI's architectural design of the Telephone Exchange Branch of Hiroshima Post Office built in 1928 and Hiroshima Posts and Telecommunications Office built in 1933. We try to concern real images of design activities by Akira UENAMI. In addition, this paper is consisted of 3 chapters as follows; 1) It focuses on various design activities by Akira UENAMI as a staff of the Ministry of Posts and Telecommunications. 2) It points out relations on Akira UENAMI and two buildings designed by him, Telephone Exchange Branch of Hiroshima Post Office and Hiroshima Posts and Telecommunications Office. 3) It clarifies tendency of his works comparing with the characteristics of typical buildings of the Ministry of Posts and Telecommunications.

**Keywords:** Akira UENAMI, Telephone Exchange Branch of Hiroshima Post Office, Hiroshima Posts and Telecommunications Office, Ministry of Posts and Telecommunications, Design Tendency

上浪朗、広島郵便局電話分室、広島逋信局庁舎、逋信省、作品傾向、

## はじめに

日本近代建築の発展において、大正から昭和の初めにかけての逋信省営繕課の設計組織<sup>1)</sup>が大きな役割を果たしたことはよく知られている。当時の逋信省の設計組織の設計の実働は、和田信夫の下に吉田鉄郎や山田守らが配され、さらに若手の中山広吉、上浪朗らが支えるという構成であった。これまで、山田守や吉田鉄郎については多く論じられており、彼らの作品や言説は当時の建築界に絶大な影響を与えたことは日本近代建築史において特筆されている。つまりこの時期、よく知られた吉田鉄郎や山田守を除けば、若手の上浪朗らの存在が無視し得なくなってくる<sup>2)</sup>。特に、大正11年入省した上浪朗については、数多くの逋信省営繕建築の設計に関与したといわれながら、今のところ十分に研究されているとはいえない<sup>3)</sup>。今回、地方における建築家の活動に関する研究を進めていく過程で、上浪朗の設計によって広島に建てられた広島郵便局電話分室(昭和3年)と広島逋信局庁舎(昭和8年)建築に関するいくつかの情報が明らかになった。そこで、本稿は、広島における上浪朗の二つの作品に着目し、さらに彼の一連の逋信局舎建築にも目を配りつつ、彼の作品特徴について考察するとともに、逋信省の設計組織における上浪朗の設計活動の位置付けを試みる。第1章では逋信省の設計組織における上浪朗の建築活動について若干の確認と補足を行う。第二章では上浪朗と広島郵便局電話分室や広島逋信局舎建築との関りを検討し、これらの作品の建設経緯や建築特徴について考察する。

第3章では広島に見る二つの作品を中心に、上浪朗の一連の逋信局舎建築作品を取り上げ、当時の逋信省の建築デザインの主な流れと比較させながら、彼の作品特徴や傾向について考察する。

当時の逋信省営繕建築について、同省の特定の建築家に関しては、既に向井寛らによる相応の蓄積があり<sup>4)</sup>、その組織に視点をおいて論じたものとして丹羽和彦や小原誠らの先行研究がある<sup>5)</sup>。本稿ではそれらを適宜参考にした。なお、今回中国郵政局建築部、中国電気逋信局建築部から広島における上浪朗の作品に関する貴重な資料を提供され、いくつかの情報が明らかになった。

## 1. 逋信省経理局営繕課と上浪朗

上浪朗(以下、上浪と略する場合ある)は、明治30年大阪に生まれ、大正11年東京大学工学部建築学科を卒業し、同年逋信省経理局営繕課に就職し、逋信省の建築家になった。同年経理局営繕課技師に任命されている<sup>6)</sup>。逋信省の営繕課は大正8年に官房経理課営繕係から再度復活したばかりであり、課長内田四郎、和田信夫、武富英一らの技師、大正6年参加の大島三郎を始めとする若手の岩元録(大正7年)、吉田鉄郎(大正8年)、十代田三郎(大正8年)、分離派で活躍をする山田守(大正9年)などがいて、再生の気運みなぎり、おのずと創作活動も活発化しつつある時であった。この時期の営繕課(臨時逋信電話局を含む)は、課長内田四郎を筆頭に、当時に係長を務めていた和田信夫が設計全般の実際を総括していたと

\* 広島国際大学建築創造学科 講師・博士(工学)

Lecturer, Department of Integrated Architecture, Hiroshima International University, Dr. Eng.

\*\* 広島国際大学建築創造学科 教授・工博

Prof., Department of Integrated Architecture, Hiroshima International University, Dr. Eng.

言われ、大島三郎は構造・施工を担当しており、また竹富英一も当時専ら施工を担当していたと言われている<sup>70)</sup>。従って設計の実動は、和田の下に吉田や山田守が配され、さらに若手の中山広吉、上浪朗らが支えるという構成であったと見ることができる。大正12年頃の組織構成については丹羽和彦らによって詳しく論じられている<sup>71)</sup>。ここで昭和2年に通信省経理部で創刊された部内誌「構想」の消息欄によって昭和初期の設計部の名簿と工事人名簿を作成すると、表1と表2のようになる。

表1 通信省経理局営繕課設計部名簿 (昭和2年10月1日技師以上)

所属	職階	名前
設計部	主任	和田信夫技師、川崎角次技師
設計1班	主査	張菅雄技師
設計2班	主査	山田守技師
設計3班	主査	吉田鉄郎技師
設計4班	主査	中山広吉技師
設計5班	主査	木村栄二郎技師
設計6班	主査	上浪朗技師
構造計算	主査	大島三郎技師
電気設備	主査	大島三郎技師
水道ガス設備	主査	大島三郎技師
暖房機械設備	主査	大島三郎技師
仕様見積	主査	石山技師
修繕	主査	石山技師
写図	主査	木村技師
青写真	主査	中山技師
材料実験	主査	大島三郎技師

注:表1は昭和2年に創刊された部内誌「構想」(日本電信電話公社電信電話事業史編集委員会編、『電信電話事業史第5巻』1960年3月に所収)を参考に作成した。

表2 通信省経理局営繕課工事人名簿 (昭和2年10月1日技師以上)

工事名	職階	名前
東京中央電話局内新設其他工事場	主査	中山広吉技師
大崎電気試験所建築場	主査	張菅雄技師
横浜電話中継所増築工事場	主査	中山広吉技師
八王子郵便局電話分室新築場	主査	中山広吉技師
江尻電話中継所新築場	主査	木村栄二郎技師
浜松郵便局電話分室新築場	主査	木村栄二郎技師
平磯電気試験所新築場	主査	張菅雄技師
銚子無線電信所新築場	主査	上浪朗技師
名古屋中央電話局中分局新築場	主査	山田守技師
岐阜郵便局電話分室新築場	主査	山田守技師
金沢郵便局電話分室新築場	主査	山田守技師
飯田郵便局電話分室新築場	主査	木村栄二郎技師
天下茶屋郵便局電話分室新築場	主査	山田守技師
住吉郵便局電話分室新築場	主査	吉田鉄郎技師
尼崎郵便局電話分室新築場	主査	上浪朗技師
堺郵便局電話分室新築	主査	上浪朗技師
京都中央電話局祇園電話分局新築	主査	上浪朗技師
広島郵便局電話分室新築場	主査	上浪朗技師
福山郵便局電話分室内新設其他工事場	主査	上浪朗技師
熊本郵便局電話分室内新設其他工事場	主査	中山広吉技師
八幡郵便局電話分室内新設其他工事場	主査	山田守技師
宮崎郵便局電話事務室新築工事場	主査	上浪朗技師
盛岡郵便局電話分室新築場	主査	中山広吉技師
札幌郵便局電話分室新築場	主査	張菅雄技師

注:表2は前掲表1の注と同じ文献を参考に作成した。

表1をみると、昭和2年頃は和田信夫と川崎角次を設計部の主任とし、設計1班から6班までを、張菅雄、山田守、吉田哲郎、中山広吉、木村栄二郎、上浪朗がそれぞれ担当していたことが分かる。ここで、設計部主任として川崎角次という技師が在籍していたことを特筆しておく。そして、構造や設備などの分野は大島三郎が担当したのである。よってこの時期、よく知られた主任の和田や吉田、山田を除けば、若手の中山広吉や上浪朗らの存在が無視し得なくなってくる。ここで、これまで上浪朗の設計作品とされている<sup>72)</sup>ものをまとめると、大分郵便局電話事務室(昭和2年)、広島郵便局電話分室(昭和3年)、熊本通信局(昭和3年)、東京中央電話局赤坂分局(昭和4年)、芦屋郵便局電話事務室(昭和4年)、東京中央電話局三田分局(昭和5年)、広島通信局(昭和8年)、岡山郵便局(昭和8

年)、呉電話分室(昭和11年)、京都中央電話局吉田分室(昭和12年)などである。ここで表2を見ると、上浪は昭和2年頃広島郵便局電話分室新築工事の主査を担当している以外に尼崎郵便局電話分室新築、堺郵便局電話分室新築、京都中央電話局祇園電話分局新築、福山郵便局電話分室、宮崎郵便局電話事務室新築、銚子無線電信所新築工事を担当したことが分かる。『電信電話事業史』第5巻によると、「・・・工事の厳正な施工を追及して大正14年には営繕課に見積係・仕様係・構造係を設け分業による専門化を進め、工事監督の配置も、鉄筋コンクリート造については工事費5万円につき1名、木造については2万円につき1名、つまり800坪程度の規模につき4名を基準として今日よりみればはるかに潤沢な配置であり、工期も現在10ヶ月に相当するものを12~13ヶ月かけて仕上げるなど、入念な施工によって設計の意図するところにこたえた。」<sup>73)</sup>となっている。これらは設計の意図に十分に答えられるように工事監督配置を行ったことを裏付ける。ここで、表2のように設計部の各技師らの工事担当が明確にされているのを見ると、設計担当者が工事にも担当した可能性が高い。また上浪が工事主査になった建物の中にはこれまで上浪の設計とされていた広島郵便局電話分室と京都中央電話局祇園電話分局が含まれていることなどから見ると、上浪が工事主査を担当した建築は彼による設計である可能性が非常に高い。なお、部内誌「構想」によると施工部の主任は和田信夫、施工や仕様内訳の全般は矢島誠一技師が担当したことが分かる。

以上のように、上浪は通信省経理課の時代、特に昭和初期に数多くの通信建築の設計や工事を担当したことが分かる。上浪朗は昭和15年航空局技師を兼任、昭和21年退官して昭和32年「構想建築研究所」を設立し設計活動を再開するが、昭和50年死去した。構想建築研究所設立以来のものとしては、簡易保険郵便年金事業団の保養センターやNHKの地方テレビ局があげられる<sup>74)</sup>。これらをまとめると表3のようになる。

表3 上浪朗の業績略年表

年号	出来事
明治30年	大阪生まれ。
大正11年	東京大学工学部建築学科卒業。通信省経理局営繕課主任技師。
大正14年	横浜中央電話局長者町分局着工
大正15年	広島郵便局電話分室着工
昭和2年	営繕課設計部設計6班主査、大分郵便局電話事務室、広島郵便局電話分室新築場の工事、尼崎郵便局電話分室新築工事、堺郵便局電話分室新築工事、京都中央電話局祇園電話分局新築工事、福山郵便局電話分室新築工事、宮崎郵便局電話事務室新築工事、銚子無線電信所新築工事の主査を担当する。
昭和3年	広島郵便局電話分室竣工、熊本通信局
昭和4年	東京中央電話局赤坂分局、兵庫県芦屋郵便局電話事務室、横浜中央電話局長者町分局竣工
昭和5年	東京中央電話局三田分局竣工
昭和8年	広島通信局竣工、岡山郵便局電話分室竣工
昭和11年	呉電話分室竣工
昭和12年	京都中央電話局吉田分室竣工
昭和15年	航空局技師を兼任
昭和21年	通信省退官
昭和32年	構想建築研究所を設立。簡易保険郵便年金事業団の保養センターやNHKの地方テレビ局などを設計する
昭和50年	死去

注:表3は向井寛の「通信省の建築家たち(1)」(電信電話公社編、『電々建築33号』1968年に所収)と「営繕課係技術職員録」(郵政省編、『郵政百年史』建築資料集、1991年に所収)や昭和2年に創刊された部内誌「構想」(日本電信電話公社電信電話事業史編集委員会編、『電信電話事業史第5巻』1960年3月に所収)等を参考に作成した。

## 2. 広島郵便局電話分室と広島通信局舎の建築

前述したように、広島における上浪朗の作品として昭和3年2月に竣工した広島郵便局電話分室と昭和8年に竣工した広島通信局2つが挙げられる。まず広島郵便局電話分室については向井寛により

上浪朗の設計であることが既に指摘されており<sup>29)</sup>、前章においてもその工事を上浪朗が担当したことが明らかになった。問題は広島通信局の設計である。昭和50年6月この局舎の撤去の際、銀メッキでいわゆる由緒いわくが書かれている銅板（縦5cm横20cmぐらいの大きさのもの）と設計図一式、それにその当時御払いをした神主のお守りなどの大事なものが入っている桐の箱が局舎の定礎板の下に納まっていることが発見されたのである<sup>30)</sup>。今回、中国郵政局建築部からその銅板の複写図が提供された。その銅板には「設計：通信技師和田信夫、大島三郎、上浪朗、設計及び監督：通信局技手伊藤政衛（当時の広島通信局管轄係長）、西川末三、施工：藤田一郎」という文字（資料1）があって、その他に協力者として当時の広島市会議員とか広島の名士ら50名の名前が連ねられていた。ここで指摘しなければならないのは、和田信夫と大島三郎の存在である。当時の臨時電信電話建設局を含めた管轄課の構成の中で、構造や施工を担当していたとされる大島はまず除外してよからう。和田は当時係長職にあつて課の設計全体をみる立場にあつたことはすでに述べたように、役職上当然、この局舎への関与はあつたと考えられる。実質的な設計にどの程度関与したか不明であり、もし和田が設計上の主要な役割を担っていたなら上浪朗の名前が記載されることはないであろう。和田が係長であつて、上浪朗の名が記載されていることは、向井覚が上浪の設計であると指摘しているように上浪朗は設計上重要な役割を担つたということであろう。



資料1 銅板の部分複写図

## 2-1. 広島郵便局電話分室

### (1) 沿革概要

広島郵便局電話分室は、広島市内中心部の市外交換と広島市の市外交換を受け持つ中央電話局として、大正15年着工、昭和3年2月広島市中区袋町6-11に建てられたのである。設計者は上浪朗である。この建物は松杭の上に鉄筋コンクリート2階建・一部3階建ての構造が載っており、延床面積は3,316㎡である。施工は清水組であった。工事の監督は通信省管轄課の西本大作、小林一郎、板橋資朗、安田政一、佐野英夫、施行は清水組で工事金額は332,340円であった。中国電気通信局建築部提供の資料<sup>31)</sup>によると、被爆時の局内設備は共電式で、市内台19、市外台35、中継台4、記録台5、監督台1で加入回線数6,680（内稼働5,100）、市外回線数246であった。被爆と共に窓の網入りガラスは吹き飛ばされ、天井の左官仕上げは落下し、器物はたたきつけられて散乱し、ほとんど全員が死傷や大火傷を受け無事のもの皆無であった。被爆後この建物は5

ヶ月を経て修復され、電話交換局として再利用されるが、最終的に敷地の利用率を高めるため建替が計画され、昭和57年8月その姿を消し、現袋町電電ビルに生まれ変わった。広島郵便局電話分室のあゆみをまとめると表4のようになる。

表4 広島郵便局電話分室の沿革略年表

年号	出来事
昭和3年2月	大正15年着工して3年をへて局舎竣工。
昭和9年4月	度数制施工。
昭和9年6月	広島電話局となる。
昭和20年8月	原爆により全焼、磁石式にて交換事務開始。
昭和20年12月	広島市外船越町に移転。
昭和22年3月	復帰。共電式。
昭和24年1月	自動改式（4000端子）。
昭和24年6月	西電話局に分離。
昭和26年11月	広島電話局西電話局と合併し、広島電話局となる。
昭和34年2月	市外電話局（基町）へ交換業務移転。
昭和38年4月	中電話局となる。（広島都市管理部発足）
昭和44年3月	構造体調査実施。
昭和48年7月	広域時分制移行。
昭和50年3月	南局へ収容替にて廃局。
昭和57年8月	建物撤去。

注：表4は中国電気通信局建築部から提供された「広島中電話局の記録」1982年8月に基いて作成した。

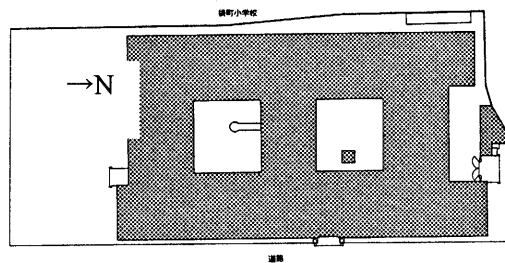


図1 広島郵便局電話分室の平面配置図

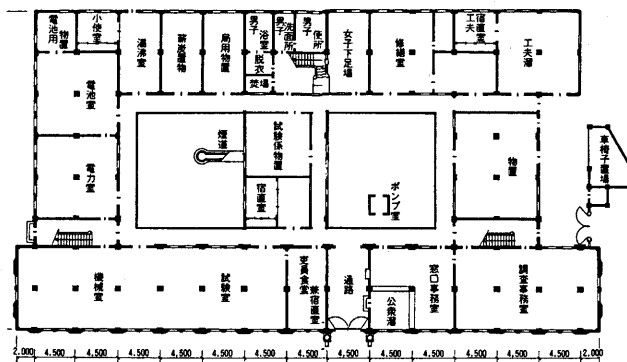


図2 広島郵便局電話分室の1階平面図

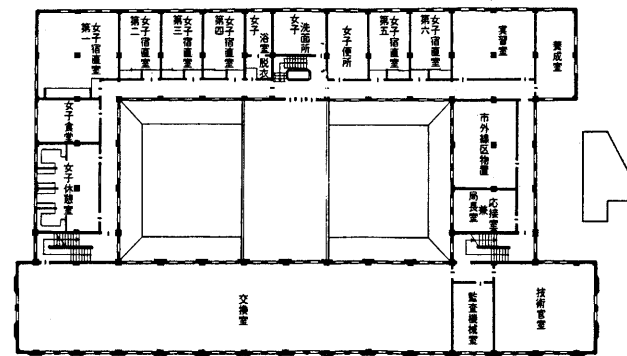


図3 広島郵便局電話分室の2階平面図

### (2) 建築特徴

敷地は東側に前面道路があり、西側には小学校が建っているほぼ長方形の敷地である（図1）。局舎は敷地いっぱいに中庭が2つある

日字型の平面で構成され、東側の表通りは1階が試験室、2階が手動交換室、西側は中庭に面して1階は電力室、湯沸室、男子浴室、便所修繕室、工夫溜など、2階には女子宿直室、女子浴室、実習室、養成室などが配置されている。日当たりの良い南側には1階は電池室、電力室、2階は女子食堂、女子休憩室を配置し、北側には物置や局長室を配置している(図2、3)。中庭真ん中にはボイラ室を設けている。道路に面した主に交換機設備を収容する空間のファサードでは、連続する堅長の窓と繰形装飾が施された半柱とのプロポーションがうまくつりあって垂直線を強調しているなどの特徴を表している(写真1、図4、5)。通用門は道路面に向かって設けられている(図6)が、通路を通るとすぐ中庭に入り、外廊下(写真3)を利用して各部屋に入れるようになっている。造形的に、入り口には繰り型が施された放物線状のアーチを設け、前には玉石が二つ設けられている。パラペット屋上には休憩室と庭園を設け、パーゴラをデザインしている(写真4)。パラペットと対照的に日字型平面の真ん中に設けられているボイラ室には勾配屋根を葺いているのが特徴的である(写真2)。当時は関東大震災(大正12年9月1日)直後であり、震災前の建物の見直しと早急な復旧を条件に、標準設計・メートル法の採用・防災の重視・鉄筋コンクリート造の採用・スチールの二重サッシュ・防火用スチールシャッター・流水防火装置が付けられた震災復興型局舎が大量に建てられていた<sup>20)</sup>。上浪朗はそれらの局舎設計に携わっていたが、広島郵便局電話分室では復興型局舎にさらにアクセント的なデザインを施している。

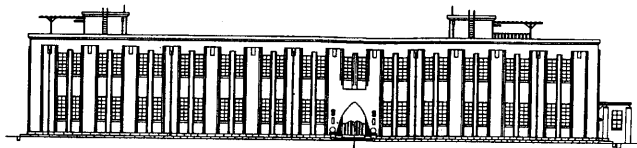


図4 東立面図

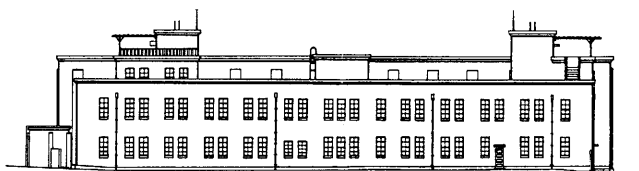


図5 西立面図

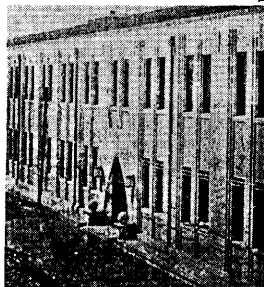


写真1 広島郵便局電話分室



写真2 鳥瞰写真(解体前の全景)



写真3 中庭廊下のアーチ

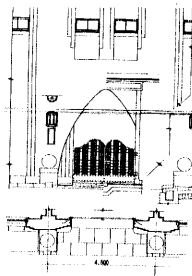


図6 通用口デザイン

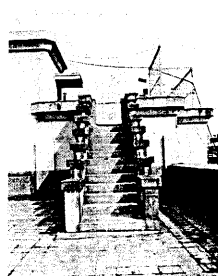
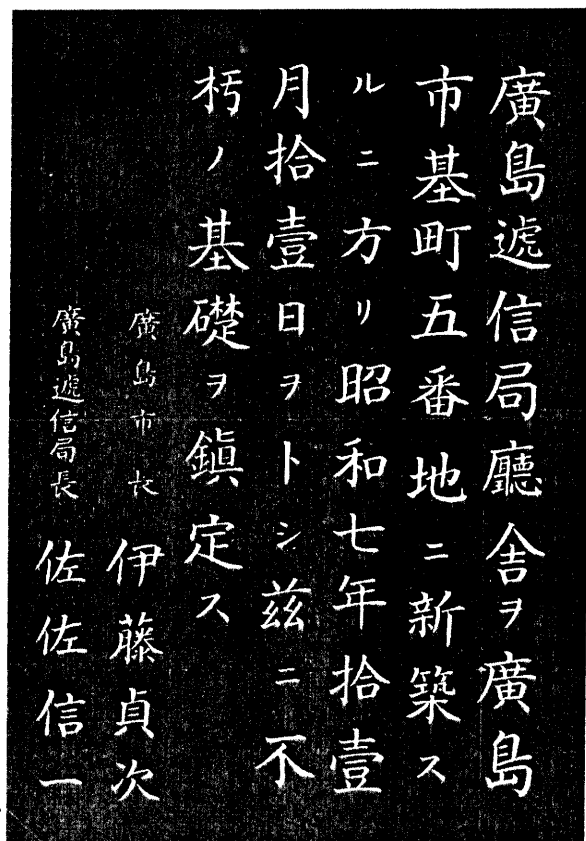


写真4 屋上階段

## 2-2. 広島通信局舎

### (1) 建設経緯と沿革

この建物は通信省の中国地方における管理機関として昭和7年3月5日着工、昭和8年3月広島市中区東白島町19番に建設された。前で明らかにしたように設計は上浪朗を含む通信省経理局営繕課であった。当時の通信省の業務は郵便・貯金・簡易保険のほか、放送・航空・電気用品検定・電信電話などの幅広い業務を管理していた。広島市は、岡山市と通信局の誘致をめぐって競い、この庁舎は全額市費の負担により建設されたものである(資料2、資料3を参照)。敷地は通信省と大蔵省の所有財産であった。建設費44万円、80年賦で通信局が広島市に償還する計画となっていた。当時うんとおかず等は11銭、芸者を呼べば1円50銭という時代であった。現在の貨幣価値に直せば、相当の工事費であった。当時の広島市役所の米重文雄管財課長は「大きな官公庁や企業を誘致しようとしていた時代だから、相当奮発したのだろう」と述べているように、当時地方では官公庁や企業の誘致にかなり力を入れていたことが裏付ける。被爆後、罹災した南側は焼け出された職員の応急住宅に当てられることになり、裏庭には釜場が設けられ、炊き出しが行われた。8月8日には暁部隊の応援を得て局内の清掃が行なわれ、8月23日に後任の磯野通信局長が着任し爾後の指揮に当たったという(写真6)。昭和24年には立ち遅れていた電信電話事業の促進のため2省分割が実施され、北翼が郵政局、南翼が電気通信局に割り振られた。昭和33年には電気通信局庁舎が基町に建設され、既に公社化されていた同部門の転出とともに、旧庁舎はすべて中国郵政局の管理するところとなった。昭和50年に旧庁舎敷地の裏側に郵政局の新庁舎が完成し6月から旧庁舎の撤去工事が行なわれ、庁舎は40年余りの短い建築生命を終えた。



資料2 銅板に刻んでいる基礎鎮定式の資料



資料3 定礎式を伝える 1932年11月9日付「中国新聞」



写真5 広島通信局庁舎外観（昭和8年竣工）

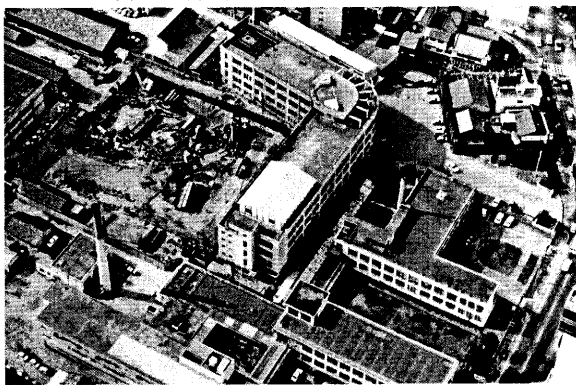


写真6 広島通信局庁舎の空中写真（昭和20年頃）

(2) 建築特徴

庁舎は広島市基町衛戍監獄跡の敷地 604 坪を占め、総建坪は 4238 m<sup>2</sup>、鉄筋コンクリート造の 4 階建て、施工は藤田組であった。平面は玄関を中心に大きなカーブを描いた L 字型になっている（写真 5）。コーナーには 2 階まで吹き抜けの玄関を配し、左右に南北翼の各執務室を配置していた。庁舎の室数は 98 室にのぼり、その配置は次の通りになっている。建設当時の新聞記事<sup>33)</sup>（資料 3）などによると、1 階には玄関、広島郵便局分室吏員食堂、炊事場、暖房機関室、宿直室、売店、商人入札室その他物置など。2 階には経理課、保険課、電話交換室、図書室、応接室、新聞記者室、書類保管室その他。3 階には局長室、庶務課、監督課、企画課、第 2（高等官用）食堂、

応接間二室。4 階には御眞影奉安室、会議室（50 坪）、工務課、電気課、調査係、ラジオ実験室、同監督室、女子更衣室など。屋上と一部 5 階には休憩室、図書閲覧室、バルコニーなどを配置していた。玄関の石段は御影石で出来ており、外壁はクリーム色のタイルを張り、ほぼ桁行スパン一杯に設けられた大きな窓が整然と並ぶモダンな建築であった（写真 5）。周辺には人家は数えるほどしかなく、付近は竹藪だった。当時の広島には、これほど大きくて立派なビルは珍しく、毎日多くの見学者が訪れ、「白亜の殿堂」とも言われたという。このようなスタイルは当時通信省経理局営繕課の潮流であったが、それをリードして来たのは吉田鉄郎と山田守であった。彼らの合理主義的な建築設計活動は後輩である上浪朗らにも大きな影響を与えたと思われる。この建物のデザインには昭和 6 年 12 月建てられた吉田鉄郎設計の東京中央郵便局の影が浮かんでいる。入口の周辺に細かい窓などを設けるなどのデザインは上浪朗の好みであったかもしれない。なお、屋上に休憩室やテラスを設け、パーゴラを施している。この建物は、当時合理主義的な建築設計活動の先導的な役割を演じていた通信省経理局営繕課の作品の 1 つであったと言ってもよいだろう。この局舎は後の山田守設計の広島通信診療所の建築（昭和 10 年）とともに、当時の広島においては極めてモダンな建築であった。これらの通信省の建築は設計者とともに地方の近代建築の発展に大きな影響を与えたと言っても良いであろう。

3. 上浪朗と通信局舎建築

前章では上浪の広島郵便局電話分室と広島通信局舎建築について考察を試みた。本章では、広島に見る二つの作品を中心に上浪の一連の通信局舎建築作品（表 5）を取り上げ、当時の通信省の建築デザインの主な流れと比較させながら、彼の作品特徴や傾向について考察する。

まず、大正末期から昭和 3、4 年頃までの作品を上げて見よう。昭和 2 年竣工した兵庫県尼崎郵便局電話分室（写真 7）や堺郵便局電話分室（写真 8）は地上 2 階の規模なもので、日字型プランになっており、ファサードは練り型装飾が施された半柱が壁面を分割し、縦長窓を挟んで垂直線を強調している。大正 14 年着工し、昭和 4 年竣工した横浜中央電話局長者町分局（地上 2 階建て、写真 9）は、L 字型の平面の角部に丸を付けており、ファサードは角を丸めた部分に練り型装飾が施された入口を設け、壁面は尼崎郵便局電話分室らとほぼ同じようなデザインになっている。この 3 つの局舎建築は、いずれも昭和 3 年竣工した広島郵便局電話分室とほぼ同じ時期の上浪の作品であり、練り型装飾が施された半柱や縦長窓などのデザインに共通的な意匠が見られるが、アーチ形のデザインは用いられていなかった。上浪の作品にアーチ形デザインが登場するのは広島郵便局電話分室に次いで昭和 3 年竣工の熊本通信局舎と昭和 4 年竣工の芦屋郵便局電話事務室であった。熊本通信局（写真 10）は地上 4 階の堂々たる局舎である。L 字型の平面の角部に面を取っており、ファサードは角部の面の 1 階部分に白い御影石貼りの大きなアーチ形の入口が設けられており、その両翼の一階の窓開口に接して白い御影石の連続アーチが設けられている。2 階から 4 階の縦長窓開口部に白い御影石のレリーフ装飾を施し、垂直線を強調している。芦屋郵便局電話事務室<sup>34)</sup>（地上 2 階建て、写真 11）は、入り口にアーチ形のデザインが施され、さらに一階の窓開口に接して白い御影石

の連続アーチが設けられているなど、熊本通信局舎と同様なデザインになっている。なお昭和2年頃竣工した京都中央電話局祇園電話分局（地上2階建て）は、L字型の平面構成になっており、窓開口は縦長くデザインされ、所々にアクセント的な装飾が施されている。ここで、同じ大正末期における通信省局舎建築群と比較してみよう。ここに言う作品群とは、多く大正の後半に設計され、末期までに竣工を見た電話局舎で、主に山田守もしくは通信省の「分離派風局舎」<sup>200</sup>を示す。先ず当時の局舎建築群は、ドレンチャー（流水防火装置）用高架水槽のための2層分の高さの塔屋が屋上に突き出し、その頂部は円弧、放物線、多角形ないしは方形を呈し、円弧状繰り型をもつ。なおこのドレンチャーは、関東大震災以降には防火シャッターに変わり、通常の高さの塔屋となる共通の特徴をもっていた。ここで上浪朗の作品を見ると、広島郵政局電話分室は関東大震災以降の作品として防火シャッターを使用し、通常の高さの塔屋になっているが、そのデザインは簡単な方形を呈し、円弧、放物線などの複雑なデザインは一切付けてない。その代わりに屋上には休憩室やデッキを設け、その周辺にはパーゴラがデザインされている。丹羽和彦が指摘している<sup>201</sup>ように、当時の局舎建築群はいずれも集中型の平面になり、交換手の休憩室が3階の一部ないしは全部を構成し、窓には多くアーチ型ないしは同型の繰り型をつけて、交換機等を収容する他の階とは区別した処理がとられ、主に交換機設備を収容する一般階では、鉄筋コンクリートの主柱がフルートの施された半円柱を呈して壁面を分割し、間柱も同様の意匠で処理されることが多い。したがって自ずと垂直線が強調され、上層階部分とは強く区分されたファサード構成をとるなどの特徴になっているが、上浪朗が設計した広島郵政局電話分室は、日字型の平面になり、中庭を過度空間として機能によって空間を配置する意匠を呈した。ファサードは連続する主柱と間柱によって垂直線を強調しているものの、柱のデザインはフルートの施された半円柱ではなく繰り型装飾が施された半角柱であった。このような垂直線を強調する外観のデザイン手法は一年前の大正14年着工の横浜中央電話局長者町分局や昭和2年11月竣工の堺郵便局電話分室などにも見られる。なお前でも述べたように、当時山田守らの表現派局舎の頂階の窓にアーチ形を繰り返すなどのデザインが多かったが、上浪朗の作品は頂階の窓ではなく、入口や1階のまどにアーチ形を繰り返すデザインになっている。特に、広島郵便局電話分室の作品には正面の通用門に繰り型が施された放物線状のアーチが用いられ、また、昭和3年竣工の熊本通信局庁舎や昭和4年竣工の芦屋郵便局電話事務室はアーチ形の入り口を設け、さらにファサードの一階の外壁に接して白い御影石の連続アーチがデザインされているなど独自の手法になっている。

次に、昭和8年竣工の広島通信局庁舎は、一般的に装飾的なものは一切付けず外壁はクリーム色のタイルを貼り、大きな窓を整然と設けるなどモダンな建築であった。このようなスタイルは当時通信省経理局営繕課の潮流であったが、それをリードして来た吉田鉄郎と山田守らの合理主義的な建築設計活動は後輩である上浪朗らにも大きな影響を与えたと思われる。広島通信局の建築は後に山田守設計によって広島に建てられた広島通信診療所の建築<sup>202</sup>（昭和10年）に比べてやや重厚な感じを与えているが、当時の広島においては極めてモダンな建築であった。この建物は当時合理主義的な建築設計活動の先導的な役割を演じていた通信省経理局営繕課の作品の1つ

であったと言ってもよい。また屋上の休憩室や入り口の周辺に変形を加え、特徴的な細部意匠を施すなど、上浪朗の独自性も現れている。これらのデザイン手法は、昭和3年竣工の広島郵便局電話分室にも現れていた。同じく上浪設計によって昭和8年竣工した岡山郵便局（写真12）は地上3階の大規模なもので、窓開口がやや縦長く重厚な感じを与えられるなど、広島通信局舎と同時期の設計とは思えないほど保守的な外観になっている。また昭和11年に竣工した広島県呉電話分局建築<sup>203</sup>（写真13）は地上3階の規模なもので、L字型の平面に丸を付ける平面構成になっており、外壁に白色のタイルを張り、やや大きい開口窓が整然と並ぶなどシンプルな建築に見えるが、入り口の正面両側には堅細長い窓が設けられている。昭和12年京都に建てられた京都中央電話局吉田分室（3階建て、写真14）は、大きな窓開口が特徴的でスマートな感じを与えるなどモダンな建築であった。上浪朗の大正末期、昭和3、4年頃の作品はやや折衷主義的な印象を与えられ、昭和8年頃になると段々合理主義的な建築方向へ変遷されるが、彼の作風は当時合理主義を目指す通信省の建築としては極めて保守的でもあった。

通信省は昭和7年10月24日通信省の建築設計方針に関連して「設計申し合せ」<sup>204</sup>を決定した。これは電話交換局舎建築設計を基準として作成したものであり、局舎建築の機能性、材料の選定などについて規定し、建築の合理化経済化に関する研究項目として「設計に関する事項」、「設備に関する事項」、「施工に関する事項」等についても委員会を設けて慎重審議することとしたのである。デザインについては厳格な申し合せというものはなく、各技師が以心伝心で了解してやること、となっている。このような建築合理化、経済化を求める設計方針への流れは、上浪朗の古典様式主義傾向から合理主義的な建築設計活動への傾斜に直接的な影響を与えたと思われる。また、これらは組織を前提とする通信省における建築家の設計活動の一つの特徴でもあっただろう。

表5 上浪朗の設計と考えられる一連の通信局舎建築作品の分析表

年号	作品	規模	平面	窓形	アーチ	ファサードのデザイン特徴
昭和2年	広島郵便局電話分室	RC・2階	日字	縦長	なし	垂直線が施された半角柱が壁面を分割し、堅長窓とともに垂直線を強調
	堺郵便局電話分室	RC・2階	日字	縦長	なし	垂直線が施された半角柱が壁面を分割し、堅長窓とともに垂直線を強調
	京都中央電話局祇園電話分局	RC・2階	L字	縦長	なし	アクセント的装飾が特徴
	福山郵便局電話分室	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
	宮崎郵便局電話分室	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
	銚子無線電信所	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
昭和3年	広島郵便局電話分室（大正15年竣工）	RC・2階	日字	縦長	有	繰り型が施された半角柱が壁面を分割し、堅長窓とともに垂直線を強調。繰り型アーチの開口、屋上のパーゴラ
	熊本通信局	RC・4階	L字	縦長とアーチ状	有	堅長の窓枠の装飾帯、ファサードの一階の外壁に接して白い御影石の連続アーチが施されている
昭和4年	横浜中央電話局長者町分局（大正14年竣工）	RC・2階	L字・R	縦長	なし	垂直線が施された半角柱が壁面を分割し、堅長窓とともに垂直線を強調
	東京中央電話局赤坂分局	RC・2階	不詳	縦長	なし	堅長の窓枠の装飾帯
	兵庫県芦屋郵便局電話事務室（昭和2年竣工）	RC・2階	L字	縦長とアーチ状	有	入口のアーチと一階の外壁に接して白い御影石の連続アーチや獅子彫像とレリーフ装飾などが特徴
昭和5年	東京中央電話局三田分局	RC・2階	L字	縦長	なし	突出した2階窓に設けた堅長の窓、ベントウスの扱ひなど
昭和8年	広島通信局	RC・4階	L字・R	大きな開口	なし	装飾的なものは付けず大きな窓が整然と並ぶモダンな建築。入口周辺や屋上休憩室の細かいデザインも特徴
	岡山郵便局電話事務室	RC・3階	L字・R	縦長	なし	装飾的なものは付けずやや堅長窓が整然と並ぶ重厚な建築。入口周辺に変形を加えた細部意匠
昭和11年	呉電話分室	RC・3階	L字・R	大きな開口	なし	装飾的なものは付けず大きな窓が整然と並ぶモダンな建築
昭和12年	京都中央電話局吉田分室	RC・3階	口字	大きな開口	なし	大きな窓が整然と並ぶ明るくスマートな建築

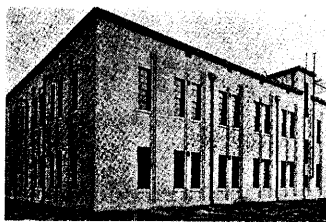


写真7 尼崎郵便局電話分室 (昭和2年)

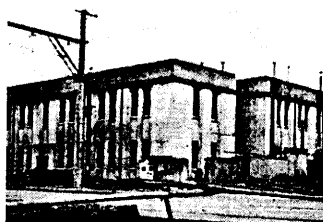


写真8 堺郵便局電話分室 (昭和2年)

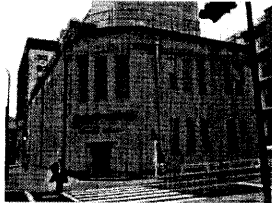


写真9 横浜中央電話局長者町分局 (昭和4年)

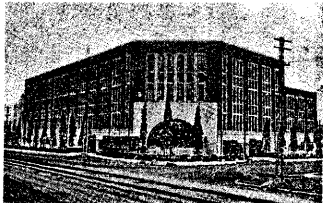


写真10 熊本通信局庁舎 (昭和3年)

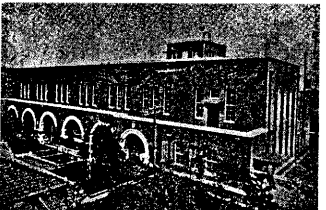


写真11 兵庫県芦屋郵便局電話事務室 (昭和4年)

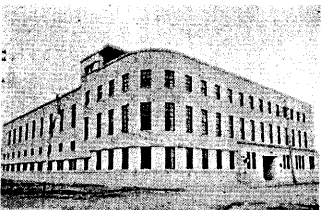


写真12 岡山郵便局電話事務室 (昭和8年)

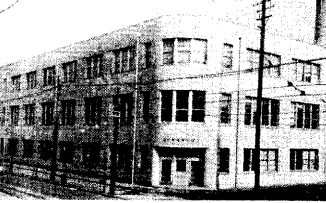


写真13 広島県呉電話分局 (昭和11年)

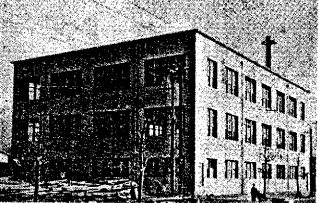


写真14 京都中央電話局吉田分室 (昭和12年)

おわりに

大正11年東京大学建築学科を卒業し、通信省経理局営繕課に就職した上浪であるが、入省直後の大正11年から13年頃の建築作品については今のところ不明である。本稿では、昭和2年頃の上浪は設計部設計6班の主査技師として設計活動を行ったことを明らかにし、また昭和2年頃だけでもこれまで彼の設計と明らかになっている広島郵便局電話分室や京都中央電話局祇園電話分局を含む数多くの新築工事を担当したことを明らかにした。なお、それらの建築は上浪が設計した可能性が非常に高いことを示唆した。このように上浪は数多くの通信建築の設計や工事に関与したと思われるが、広島では広島郵便局電話分室と広島通信局庁舎の二つの建築作品を残した。これらの作品を見ると、まず昭和3年竣工した広島郵便局電話分室の建築は、放物線状アーチ形通用門に同形の線り型が施されており、連続する縦長の窓と線り型装飾が施された半柱がうまくつりあって垂直線を強調しているなどの特徴を表している。次に昭和8年に竣工した広島通信局庁舎の建築は、屋上の休憩室や入り口の周辺に変形を加え、特徴的な細部意匠を施すなど上浪の個性的な作風も現れているものの、一般的に装飾的なものは一切付けず外壁はクリーム色のタイルを貼り、大きな窓が整然と並ぶなどモダンな建築であった。この局舎は後の山田守設計の広島通信診療所の建築(昭和10年)とともに、当時の広島においては極めてモダンな建築であった。上浪が設計した一連の通信局舎建築を見ると、大正末期や昭和3、4年頃の作品は、様式建築の要素を残しながらも、入口や1階アーチ状窓周辺、壁に突き出した半柱に変形を加え、特徴的な細部意匠を施

すなど、新たな脱皮をはかろうとするファサードデザインをもってしたが、当時の通信省の建築としてはやや保守的な印象を与えられた。昭和8年頃になると段々合理主義的な設計活動の方向へ変遷するが、それは昭和7年から通信省営繕課が実施した合理主義的な設計方針が、上浪の建築設計活動に直接的な影響を与えたと思われる。これらはまた組織を前提とする通信省における建築家の設計活動の一つの特徴でもあった。いずれにしろ上浪の作品は、組織を前提とする通信省の建築としてはやや折衷的な印象を与えるなど、一部の個性が突出していたと言ってもよいだろう。

謝辞

本稿をまとめるあたり、中国郵政局建築部、中国電気通信局建築部から広島通信局舎と広島郵便局電話分室に関する貴重な情報を提供していただいた。記して深謝申し上げる。

図・写真の出典

図1~5は中国電気通信局建築部提供。写真1は山口義徳提供。資料1~2、写真2~6は中国郵政局建築部設計課提供。写真7、8、10、11、12、14は『通信建築』(電気通信省建築部編 昭和27年3月30日)に所収。写真13は呉市役所編集『呉の歩み』(平成元年3月15日発行)に所収。写真9は筆者が2005年度撮影。

注

- 注1) 明治から昭和初期にかけて諸官庁の中で、大学卒業(主に東京帝国大学)の建築家を擁して、全国に郵便局・電話局、放送・航空関係の諸設備を自主設計していたのが通信省経理局営繕課であった。大正9年山田守と同期に入省した大正15年退職した森泰治の設計活動については小原誠と丹羽和彦の研究によって明らかになった。小原誠、丹羽和彦「分離派風局舎」と通信省営繕課の建築(日本建築学会計画系論文集第516号P258)を参照。
- 注2) 向井寛「通信省の建築家たち(1)」(電信電話公社編『電々建築33号』1968年に所収)や丹羽和彦、小原誠著「分離派風局舎」と通信省営繕課の建築—大正後期の通信省建築に関する研究その2(日本建築学会計画系論文集第516号257-264、1999年2月)などにおいて紹介されているのみである。
- 注3) 近年の主要な刊行図書をあざると、山田守建築作品集刊行会、『山田守建築作品集』(東海大学出版会、昭和42年)。吉田敏郎建築作品集刊行会、『吉田敏郎建築作品集』(東海大学出版会、昭和43年)。日本電信電話公社建築局、『建築図録/東京中央電話局』、前掲載。向井寛、『建築家 山田守』(東海大学出版会1992年)。向井寛、『建築家・吉田敏郎とその周辺』(相模書房昭和56年)。向井寛、『建築家・吉田敏郎の手帳』(鹿島出版会昭和44年)。向井寛、『建築家・岩元禄』(相模書房、昭和52年)。向井寛、『通信省の建築家たち(1)』(電信電話公社編『電々建築33号』1968年)に所収。
- 注4) 丹羽和彦、小原誠著「分離派風局舎」と通信省営繕課の建築—大正後期の通信省建築に関する研究その2(日本建築学会計画系論文集第516号257-264、1999年2月)や神代健一郎「分離派の運動と東京中の歴史的考察」(日本電信電話公社建築局『建築図録/東京中央電話局』電気通信局協会昭和44年)の中で通信省経理局営繕課について論じている。他の中 真巳「概索・展開・継承—通信建築の流レー」(近代建築 1968年12月)などの研究がある。
- 注5) 向井寛「通信省の建築家たち(1)」(電信電話公社編『電々建築33号』1968年に所収)。
- 注6) 山田守「通信建築の柱と巨匠岩元禄さんの事など」(通信外史刊行会編『通信史話』電気通信協会昭和36)を参照すること。
- 注7) 丹羽和彦、小原誠著「分離派風局舎」と通信省営繕課の建築—大正後期の通信省建築に関する研究その2(日本建築学会計画系論文集第516号257-264、1999年2月)。
- 注8) 向井寛、『通信省の建築家たち(1)』(電信電話公社編『電々建築33号』1968年)。
- 注9) 『電信電話事業史』第5巻第9編「建築—様式選択主義と建築施工」206頁。
- 注10) 向井寛、『通信省の建築家たち(1)』(電信電話公社編『電々建築33号』1968年)。
- 注11) 向井寛、『通信省の建築家たち(1)』(電信電話公社編『電々建築33号』1968年)。
- 注12) 銅版を複製したものが中国郵政局局長官庁文庫企画関係に保管されている。
- 注13) 中国電気通信局建築部、『広島中電話局の記録』1982年。
- 注14) 本稿注10、前掲書47頁によると、震災後の電話施設改修の建築について、今までの構造物に照準計算を全面で考慮導入し、また防火に意を注いだ。標準局設備は木造に、構造物は鉄骨構造に。これらに比類し、意匠は「ルネッサンス」または「モダン ルネッサンス」で、窓枠に対して高さ $\sqrt{3}$ の傾斜となり、内側向きサッシに次いで外側向きサッシ、さらにスチールシャッターという三重構造とした。外壁はさび色人造石洗出し、目地なし仕上げであり、これはその後地方にも波及し、大阪・横浜・瀧川・新潟・札幌等この復興型になったという。
- 注15) 昭和7年11月9日付「中国新聞」には「竣工近き廣通局新庁舎十一日同局と廣島市で定礎式を行ふ」見出しで報道されている。
- 注16) この建物は、戦時中に空襲から通信設備を守るためタールで真っ黒に塗られ、戦後はさらにその上から白一色に厚塗りされ、建築当初の面影は失われていた。昭和59年改修時に、塗装を高圧水で洗い落とし、新築当初の姿が甦る。99年にはNTT芦屋営業所も統廃合で無くなり、その後NTT西日本芦屋別館事務棟として関連会社が使用していたが2003年10月末に閉鎖。2005年2月から兵庫(芦屋)レストラン・ハウスとして使われ、入口に鋼製の庇を付けるなど少し変貌しているが、建設当時の姿をほぼ保っている。
- 注17) 本稿注8、前掲書を参照すること。ここでは「分離派風局舎」について「大正末期の通信省の建築は、西洋の様式建築の習熟から脱皮して近代合理主義の建築へと向かう当時の我が国建築界の先駆者の動きに、ほぼ同時期に行っている。そこでは一連の特種的な建築デザインが生産されたのだが、それらは往々にして「分離派風局舎」として一括されてきた。その由来の一つには、『分離派建築会の作品』(第二集)に山田守が掲載した作品、「ある電話局の草案」があると思われる。」と解説している。
- 注18) 本稿注8、前掲書。
- 注19) 広島通信診療所の建築は山田守の最初の病院建築設計であり、規模が小さいが、その設計理念と手法はのちの東京・大阪通信診療所にも大きな役割を果たした建物である。広島通信診療所の建築については、李明、石丸未典「広島通信診療所の建築について」日本建築学会計画系論文集第540号、P307-314、2001年2月を参照すること。
- 注20) 広島県呉電話分局は電話交換方式を自動式に改式に伴って昭和11年11月3日呉市岩方通り3丁目18の1に電話分室として新築された。昭和20年7月2日呉地区空襲により全焼。
- 注21) 『高等建築学19・建築計画7通信省の建築』(常磐書房1933年)P118、122、123、124を参照。

(2006年2月6日原稿受理、2006年8月18日採用決定)